

朝倉高等学校

「ICTを活用した授業の浸透と対話・討論による深い学びの創造」

1 主題設定の理由

平成30年度及び令和元年度の2年間を通して、新たな学びプロジェクト研究実践校として取り組んだ結果、本校のICT機器を活用した授業の開発は大いに進んだと言える。今年度は、その活用方法の整理・とりまとめと、教員の効果的な研修方法の検討、また、「主体的・対話的で深い学び」を目指して、対話・討論を取り入れた授業の開発を行うことを目的とし、このテーマを設定した。

2 研究仮説

過去2年間の「新たな学びプロジェクト」研究実践校としての取組で得られた、ICT活用技術の共有を促進させ、全職員間に浸透させることで、多くの教員がより効率的・効果的な授業を実践でき、未来を切り拓く力を持った生徒が育つであろう。

また、対話・討論を取り入れた授業を実践することで、生徒が主体的に学ぶ機会や他者との対話を通じた、深い学びの機会が増えるだろう。その際の学習評価方法の検証と改善を行うことで、高い志と意欲を持った、自立した生徒が育つであろう。

3 研究の構想

(1) 校内組織

役名	職名	氏名	担当教科
リーダー	教諭	近藤 英利	理科
サブリーダー	教諭	畠中 優成	理科
メンバー	教諭	川口 仁美	国語
メンバー	教諭	熊本 修治	地理歴史
メンバー	教諭	堀 洸祐	数学
メンバー	教諭	蓮尾 啓祐	保健体育
メンバー	教諭	清末 莉央奈	外国語
メンバー	教諭	溝上 彩佳	外国語
メンバー	教諭	宮本 捺恵	家庭

(2) 本校のICT環境

電子黒板・実物投影機（全教室・講義室）、アクティブ・ラーニング教室（電子黒板5台配置）タブレット端末88台、移動式電子黒板3台、生徒用無線LANネットワーク、撮影同時配信システム



各教室配備の電子黒板・実物投影機・タブレット端末

(3) 研究の工程

月	内 容
4 月	研究テーマの決定 教科別研修 (Can-Do リストの作成、対話・討論を含んだ授業) 第 1 回自己診断
6 月	校内研修①「新高等学校学習指導要領と学習評価の改善」
7 月	校内研修②「学習評価の在り方」
9 月	第 2 回自己診断
10 月	対話・討論を取り入れた授業の実践
11 月	授業に関する生徒アンケート 第 3 回自己診断
12 月	地区版実践発表会の開催
1 月	報告書の作成・提出

4 研究の実践

(1) ICT活用技術の「Can-Do リスト」の作成と定期的自己診断

平成30年度、令和元年度の研究を通じて、ICT活用技術の開発は大いに進んだ。その技術を「すべての教科で活用できる技術」と「教科の特性に応じた技術」に分類し、今年度当初、8月終了段階、11月終了段階で「できる」または「できない」の自己診断を行った。

できない技術については、各教科に所属する新たな学びプロジェクトメンバーを中心として技術の普及を図った。

ア 「すべての教科で活用できる技術」6項目

- ①書画カメラのみを起動し、教科書やプリントを映す。
- ②「Image Note」で書画カメラを操作し、「PenPlus」で画面に書き込む。
- ③デスクトップ上にある PowerPoint スライドを表示させながら説明する。
- ④パソコン教室やタブレット端末で生徒に PowerPoint スライドを作成させる。
- ⑤生徒が作成し生徒共有上に保存したスライドを教室内で活用する。
- ⑥生徒のノート等を、タブレット端末を通じて画面に映し活用する。

イ 「教科の特性に応じた技術」4項目

国語

- ・デジタル教材（教科書・副教材）を活用する。
- ・PowerPoint で教材を作成し活用する。
- ・生徒の文章や作品を書画カメラや PowerPoint で提示して活用する。
- ・本文の論理展開や内容のまとめを PowerPoint を利用して生徒が発表する。

地理歴史

- ・インターネットを活用した情報収集を行う。
- ・文化遺産を示しながら特徴や意義について討論を行う。

- ・クラスを2分割してディベートを行う。
- ・他学年クラス間で同時にディベートを行う。

数学

- ・書画カメラを活用し、解答を提示し生徒が説明する。
- ・書画カメラを利用し、わかりやすい図形やグラフを提示する。
- ・生徒は解答を電子黒板に提示し、説明する。
- ・GRAPES等を活用し、視覚的にわかりやすい授業を展開する。

理科

- ・デジタル教科書を活用し、授業を進める。
- ・デジタル教科書に含まれる画像や動画を効果的に活用し、授業を進める。
- ・書画カメラで教師による実験の様子を示す。
- ・自ら撮影した画像・動画を用い、授業で活用する。

保健体育

- ・タブレット端末による動画での説明
- ・PowerPointでの授業
- ・自ら撮影した画像・動画を用い、授業で活用する。
- ・コーチングに適したアプリを活用し授業を進める。

外国語

- ・デジタル教科書を活用し、授業を進める。
- ・発音・リスニング音源の活用
- ・授業に関連した画像や動画を用いて授業を展開する。
- ・オンライン授業による授業の復習

家庭

- ・書画カメラを活用し、縫い方や切り方などの説明を行う。
- ・タブレット端末を用いて、献立やレシピを作成する。
- ・模範動画・画像の検索や視聴
- ・作品の撮影と提示

(2) 学習評価に関する研修

学習評価の現状と課題、および、令和4年度より年次進行で実施される新学習指導要領における学習評価について2回の職員研修会を行った。この職員研修会では、参考資料として『学習評価の現状と課題』（平成29年12月11日教育課程部会児童生徒の学習評価に関するワーキンググループ）、『新高等学校学習指導要領と学習評価の改善について』（令和元年度地方協議会等説明資料）、『学習評価の在り方ハンドブック』（令和元年6月文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター）を用い、ワークシートに取り組む形式で実施した。

第3回職員研修「新たな学びプロジェクト」学習評価」ワークシート①
サブテーマ「新高等学校学習指導要領と学習評価の改善」

課題 「資料①、②の指定されたページを参照し、一般的な現状として、以下の文章が正しければ○を、間違っていれば×を記入して下さい。」
(資料:共有→R2年度→教員→全日制→研修課→6月29日配布分フォルダ)

文章	参考ページ	○×
「学習評価＝成績」ではない。	資料① p1, 12	
評定平均値を大学入試で求められるため、本質的な観点別学習状況の評価が進められない現状がある。	資料① p1	
2022年度入学生より新学習指導要領改訂が実施される。	資料② p6	
新学習指導要領での主な改善点は、言語能力、理数教育、伝統文化、道徳、外国語、職業教育がキーワードとしてあげられる。	資料② p28, 29	
学習評価の結果は、生徒の学習の改善、教師の指導の改善などに生かすものである。	資料② p37, 42	
新学習指導要領の趣意において、指導と評価の一体化の必要性が明確化された。	資料② p39	
学習評価の現状については、「関心・意欲・態度」の観点について、生徒の性格や行動面の傾向が一時的に表出された場面をとらえる評価であるような誤解が払拭されていない。	資料② p41	
新学習指導要領では、評価の観点以下の3つに整理された。 【知識・技能】【思考・判断・表現】 【主体的に学習に取り組む態度】	資料② p44	
指導要録の参考様式にも各教科・科目の観点別学習状況を記載する欄が設置された。	資料② p46, 53	

第3回職員研修「新たな学びプロジェクト」学習評価」ワークシート②
サブテーマ「学習評価の在り方」

課題Ⅰ 配布資料Aのうち、ご自分の教科の「評価の観点のイメージ」を確認してください。(確認したら右に✓を記入して下さい。)

課題Ⅱ 資料①のすべてのスライド内容を各自確認し、以下の項目について、自己評価を行って下さい。概ね満たされていると判断した場合は✓を記入して下さい。
(資料:共有→R2年度→教員→全日制→研修課→7月6日配布分フォルダ)

項目	参考スライドP	✓欄
学習評価の基本的な考え方がわかった。	p4～7	
学習評価の基本構造が理解できた。	p8～13	
「知識・技能」の評価方法の一例が把握できた。	p14	
「思考・判断・表現」の評価方法の一例が把握できた。	p15	
「主体的に学習に取り組む態度」の評価における、二つの側面について理解し、その評価方法の一例が把握できた。	p16～19	
「主体的に学習に取り組む態度」の評価における、一般的な誤解について知り、適切な趣旨を理解した。	p20	
観点別学習状況評価の充実のための、指導要録参考様式の変更箇所を把握した。	p21～22	
総合的な学習の時間、特別活動の評価について知識を得た。	p23～24	
学習評価を充実させる工夫について知識を得た。	p25～26	
障がいのある生徒の学習評価に関して、配慮すべき点について知識を得た。	p27	

職員研修会ワークシート①

職員研修会ワークシート②

(3) ICTを活用した対話・討論を含んだ授業を実践した際の評価方法の開発

対話・討論を含むアクティブ・ラーニングを実施した際、学習の評価をどのようにするか、その開発と検証が昨年度からの引継ぎ事項であった。そこで、まず、4月の教科別研修会において、各教科の特性に応じたアクティブ・ラーニングの授業形式を数項目設定し、各教員がその際の評価方法を開発する準備を進めた。

しかしながら、新型コロナウイルス感染症対策として、対話・討論を含んだ授業を推奨しづらい期間が長く続いたため、2学期の途中に計画の見直しが必要となった。その結果、新たな評価方法を開発するのではなく、各教員が年度当初に作成した、年間指導計画書様式3「年間評価計画書」に記載した、学習評価方法の検証を行う形に変更した。

ア 「すべての教科で活用できるアクティブ・ラーニング」 3項目

- ①PowerPoint を利用しての発表
- ②ブレインストーミング
- ③ペアワーク

イ 「教科の特性に応じたアクティブ・ラーニング」 2～3項目

国語

- ・作品の共同制作や発表
- ・要約文やまとめ文についてのグループ協議

地理歴史

- ・グループごとに討論し発表する。
- ・クラスを2分してのディベート

数学

- ・前時の復習を電子黒板を利用し、説明する機会を設ける。
- ・別解や誤答を提示し、どちらが良いか、どこでなぜ間違えたか討論を行う。

理科

- ・グループごとの実験

- ・ 模型製作
- 保健体育
- ・ 模範動画との比較
 - ・ 技術の教え合い・学びあい
 - ・ インターネットを利用した模範動画の検索と実演
- 外国語
- ・ スキットメイキング
 - ・ スチューデントティーチャー
 - ・ タブレット端末を利用した討論・意見交換
- 家庭
- ・ 調理実習
 - ・ 作品についてのグループ協議

5 研究の成果

(1) ICT活用技術の「Can-Doリスト」の作成と定期的自己診断

各教員が行った自己診断の結果、年度当初から最終の自己診断において、「できる」の数が増加した教員の割合は45%、変化なしの教員が55%であった。なお、年度当初の段階ですべて「できる」と回答した教員の数は、増加割合の集計には含んでいない。また、「すべての教科で活用できる技術」6項目の「できる」割合を以下の表に示す。

「すべての教科で活用できる技術」のうち最終自己診断で「できる」と回答した割合

項目	割合
書画カメラのみを起動し、教科書やプリントを映す。	100%
「Image Note」で書画カメラを操作し、「PenPlus」で画面に書き込む。	68%
デスクトップ上にある PowerPoint スライドを表示させながら説明する。	100%
パソコン教室やタブレット端末で生徒に PowerPoint スライドを作成させる。	68%
生徒が作成し生徒共有上に保存したスライドを教室内で活用する。	64%
生徒のノート等を、タブレット端末を通じて画面に映し活用する。	36%

ICTの活用技術の取りまとめと、その技術の浸透をねらった「Can-Doリスト」による自己診断であったが、「できる」の数が増加した教員が45%にとどまった結果は、決して満足いくものではなかった。ただし、「すべての教科で活用できる技術」6項目のうち、電子黒板の基礎的な使用方法である2項目は100%を達成したこと、また校内のネットワークを活用した技術について普及が進んだことは今年度の成果であるといえる。

ICT活用技術のうち、タブレット端末を利用する項目で、活用の普及が進ま

なかったことをうけ、追加で実施した教員アンケートの結果を以下の表に示す。

タブレット端末の活用に関するアンケート結果

授業中のタブレット端末の利用	全く利用していない 77%	あまり利用していない 15%	時々活用している。 8%	よく活用している。 0%
タブレット端末への苦手意識	かなりある 23%	少しある 31%	あまりない 38%	全くない 8%
タブレット端末の活用が生徒の学力向上につながっていると感じるか。	ほとんど感じない 38%	あまり感じない 43%	やや感じる 15%	とても感じる 4%

電子黒板の活用に関するアンケート

電子黒板の利用	全く利用していない 8%	あまり利用していない 4%	時々活用している。 35%	よく活用している。 53%
電子黒板への苦手意識	かなりある 0%	少しある 23%	あまりない 38%	全くない 39%
電子黒板の活用が生徒の学力向上につながっていると感じるか。	ほとんど感じない 4%	あまり感じない 15%	やや感じる 62%	とても感じる 19%

本校の、電子黒板が全教室に配備されている状況とタブレット端末を88台保有している状況は、1クラスに対する授業での使用を考えればともに充足しているといえる。ところが、利用状況では両者に大きな差がある。特に、タブレット端末活用による学力向上への期待度が、現時点ではとても低く、その結果が利用率の低さや、活用普及を妨げている要因の一つであることがうかがえる。タブレット端末が使いづらいと感じる原因については、「配布、起動やネットワーク回線接続に時間がかかり過ぎ、授業時間が削られる。」や「生徒の操作習熟度の差が大きいため、一斉指導の場面では使いづらい。」などの意見が寄せられた。

(2) 学習評価に関する研修

令和4年度から年次進行で実施される新学習指導要領において、学習評価の観点「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点到整理される。その変化への対応をねらい、現在、学習評価について指摘されている課題、及び新学習指導要領での学習評価の改善の基本的な方向性について学ぶ機会を設け、知識を深めることができた。(職員研修会ワークシート

①②参照)

(3) ICTを活用した対話・討論を含んだ授業を実践した際の評価方法の開発

年度途中での計画変更の結果、新型コロナウイルス感染症対策を考慮した上で、対話・討論を含んだアクティブ・ラーニングを行い、年間指導計画書に記載した学習評価の方法を改めて見直す機会を設けることができた。「学習評価の方法とABCの基準を明確にできた。」や「学習評価に関する職員研修で学んだ『学習評価は、児童生徒の学習改善と教師の指導改善につながるものにしていくこと。』をふまえて考えると、学習評価の方法を見直す必要性を感じた。」などの感想が得られた。

6 まとめ

今年度は、本校にとって、福岡県新たな学びプロジェクト研究実践指定校として3年目となる。昨年度末より、今年度の研究を、3年間の研究の集大成とするために、過去の実践を振り返り、引き継いだ課題を検証する準備を進めてきた。しかし、新型コロナウイルス感染症対策による休校をはじめ、休校中のオンライン学習対応や学校再開後の感染症対策等、学校、社会全体が極めて大きな変化と対応を求められる1年となった。

この研究のまとめでは、福岡県新たな学びプロジェクトの趣旨に従い、校内のICT機器を利用した研究実践のみについて報告した。休校中の動画共有サービスYouTubeを利用した授業動画配信や、生徒の家庭での大容量インターネット回線普及率100%の状況を整え、それを活かした学習指導については、研究対象からは除外しているため、報告を省いている。

しかし、次年度以降の課題を考える上では、急激に変化したICT環境をふまえる必要がある。他校での研究実践において、参考となるのは、福岡県立須恵高等学校の取組である。アプリケーションソフトExplain EDUを利用した授業の説明では、本校では活用が一部にとどまっているタブレット端末の利用を促進させることができる。Explain EDUを利用し、発表動画作成に取り組むことで、生徒の表現力だけではなく情報収集力や判断力、考察力の育成が期待できる。また、外部プラットフォームMicrosoft Streamを活用した事例では、生徒にとって最も身近なICT機器であるスマートフォンの授業での利用を先進的に行っている。外部プラットフォームの利点である、いつでもどこでも学べるという点は、次年度以降も続く可能性が大きい分散型の授業や、オンライン型授業に活用できる技術であると考えられる。

3年間の取組、及び急激に変化した教育環境を鑑み、次年度に向けての課題として以下の2点を掲げる。

(1) 新学習指導要領を踏まえた学習評価の具体的な評価項目の設定

(2) 校内と校外をつなぐ学びの体制づくり

変化の激しい社会の中でも、立ち止まらない学びの体制を目指し研究を継続していきたい。

1 単元名

英語会話 英語ディベートの実践

2 単元設定の理由

○ 単元（題材）観

本単元では、ディベートの理論とその実践について学ぶ。例年では、ALT を交えて実践的に英語を使ってやり取りをするが、新型コロナウイルスの影響により、あまり活発にできなかった。そのため、2学期からは実践的に英語を使う場としてディベートに取り組むことにした。大学や将来の仕事において、自分の意見を述べる機会が更に増えると予想されるため、英語ディベートを通して体験させたい。

今回は、厳密なディベートの規則にこだわらず、生徒たちがディベートに慣れ親しむことを目的とし、人前で話し、相手の論点について考えることに慣れるための活動として行う。具体的に身に付けさせたい力は、以下の通りである。

- ①聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づいて、論題に対する意見を考え、論理的に伝えることができる。
- ②相手の意見を聞いて理解し、それに反論して、自分の意見がより正しいということを聴衆に伝えることができる。

(高等学校学習指導要領解説 外国語編 平成22年5月 第2章 外国語科の各科目 第7節 「英語会話」 2「内容」ア・ウに対応)

○ 生徒観

私立大学文系を主な進学希望先としている生徒が多いクラスである。英語を学ぶ意欲が高い生徒もいる中、強く苦手意識を持つ生徒も混在している。そのため、とりわけ人前で英語を話すことに対しても、意欲の差はあるが、楽しんで話そうとする姿は積極的である。

他のクラスと異なり、コミュニケーション英語Ⅲや英語表現Ⅱをより多く学習しているため、英語会話では、スピーキングを中心とした活動を通して、座学で得た知識を用いてアウトプットする場として機能させている。会話表現を覚えて繰り返し使っていくうちに話せるようになる活動を1学期実施した。現在、英語で話すことに少しずつ慣れてきた様子である。正しさよりも慣れることに重点を置いて、生徒の心理的負担を減らすための手立てを講じた。

今後は、高校卒業後も英語を学び続ける主体性と積極性を更に高めるために、より場面に適した表現の考え方や、自分で調べて書く方法を指導していく。また、コミュニケーションの原則である、相手の話を聞くこと、聞き取りやすいように話す工夫の重要性なども指導していきたい。

○ 指導観

本単元の指導に当たっては、論題に対する意見を考え、論理的に伝える力と、相手の意見を聞いて理解し、それに反論して、自分の意見がより正しいということを聴衆に伝える力の育成をねらっている。そのために、ディベートに慣れ親しむ活動や試合の機会をできるだけ多く作った。

第1次では、ディベートを学ぶ意義について、動画やワークシートを用いて講義を行った。そのあと、日本語で簡単な反論練習をいくつか身近な論題を通して行った。この時は、3人一組になり、前の人が話した論について反論してから、自分の意見を述べるという活動を行った。

次に第2次では、肯定・否定に分かれて立論の準備をした。ここでは、ワークシートを参考にさせて、自分たちの主張ポイントを2つ考えさせた。そしてその論点を支える具体的な根拠やデータを、生徒たちのスマートフォンや学校のタブレットを使って調べさせた。試合の前に、一旦教員が確認し、明らかに間違っている文法や語句の表現のみ訂正した。生徒たちは、一生懸命辞書などを使って英語で表現したが、中にはクラスの生徒がほとんど分からないような難解な単語やフレーズを使っている文が多くあった。しかし、実際に試合する中で、伝わらなかったことに気づいてもらうために、あえて指導しなかった。

第3次では、準備した資料を基に、クラス全体の前で試合を実施した。あえて指導しなかった単語や表現がうまく伝わらないことに気づき、改善の余地を見出した様子だった。また、特に優れた生徒の良い点を指導して、最終的なモデル像を共有し、再度反論の準備の重要性や声量について改善するよう指導した。

第4次では、よりよいパフォーマンスにするための改善に注力させた。特に、反論の事前準備を優先させた。入念に反論のフォーマットを指導し、反論の型を定着させる。その上で、相手側の意見を予想し、反論カードに自分たちの反論をまとめて書いた。また、声量や目線、イントネーションなどの工夫も促し、聴衆にわかりやすい発表の態度を指導した。また、できるだけ多く試合を行い、試合に慣れさせた。

第5次では、再度クラス全体でのディベートを行う。第3次で気づいた改善点がよりよくなっているかを自己分析させたい。さらに、トーナメント方式で実施することで、ディベートのゲーム性を活かし、生徒が活発に参加することを期待する。

3 単元指導目標（到達目標）

- ・聴衆にわかりやすく伝える工夫を考えて、語句の精選や発表態度などの改善をしようと試みる。

【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】

- ・聴衆に伝わりやすい発表態度や英語の流暢さを身に付けることができる。【外国語表現の能力】
- ・論理的に自分の意見を説明するために、論の組み立てや表現を理解して、使用することができる。【外国語理解の能力】
- ・ディベートのルールを学び、議論とはよりよい考えを導く手法であることを理解することができる。【言語や文化についての知識・理解】

4 単元の評価基準

ア 関心・意欲・態度	イ 思考・判断・表現	ウ 技能	エ 知識・理解
グループの意見がより説得力のあるものになるために、内容や発表態度を工夫しようとしている。	聴衆にわかりやすい発表にするために、語彙や表現の工夫、発表態度の改善をして、その能力の向上が見られる。	論理的な意見に仕上げるために、論の組み立てや重要表現を用いることができる。	ディベートのルールや定義について理解して試合をすることができる。また聴衆として、論理性や客観性で勝敗を決めることができる。

5 単元の指導と評価の計画

次	配当 時間	○学習内容 ・ 学習活動	評価方法				評価基準
			関	思	技	知	
一	4	○ディベートに慣れ親しむ活動 (日本語と英語)	○				グループで積極的に活動 に参加している。
二	3	○立論準備 肯定側と否定側を指定し、具体例を調 べながら作成する。	○				
三	4	○ディベート1回目 クラス全体で実施する。聴衆はメモを 取って勝敗を決める。		○			
四	4	○準備・練習 反論の仕方や総括の仕方、声量や視線 の練習も行う。 また、肯定側・否定側と分けずに、ど ちらの準備も行う。	○				
五	5	○ディベート2回目 トーナメント形式で実施する。ゲーム 感覚で楽しんで実施できるよう工夫 する。		○	○		声量やアイコンタクト、内 容の論理性を、教員が3段 階評価で判断する。

6 本時（第五次 5時間目）

(1) 本時の指導目標（到達目標）

- ・聴衆にわかりやすく伝える工夫を考えて、語句の精選や発表態度などの改善をしようと試みる。【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】
- ・聴衆に伝わりやすい発表態度や英語の流暢さを身に付けることができる。【外国語表現の能力】
- ・聴衆は、肯定・否定の両方の論点を理解して、客観的に勝敗を決めることができる【外国語理解の能力】
- ・ディベートのルールを学び、議論とはよりよい考えを導く手法であることを理解することができる。【言語や文化についての知識・理解】

(2) 本時の手立て

- ・英語で表現する雰囲気醸成するために、教員は基本的に英語で指示を出す。
- ・誰が発表しているかがわかるように、ネームカードを準備する。
- ・試合の流れがわかるように、PowerPointで立場や順番を明示する。
- ・聴衆が納得するための工夫の重要性に気付くために、試合に対してコメントをする。
- ・聴衆が能動的に試合を聞くようにするために、ディベートの流れの記録を取らせ、自分たちの意見と似ている点や、最も説得力のある人の選出を指示する。

(3) 本時の授業仮説

反論の仕方や事前準備を行い、試合の練習と経験を積むことによって、反論がより具体的で説得力のあるものにしあがるだろう。また、聴衆は、声の大きさや英語の分かりやすさだけでなく、論理性や客観性の視点からも、勝敗をきめることができるだろう。

(4) 教 材

生徒：①ディベートのフローシート2枚 ②ネームカード

③チームの内容が書かれたワークシート ④司会進行の台詞
 教師：①ディベートのフローシート ⑥PowerPoint スライド

⑤タイマー

(5) 学習の展開 (学習指導過程)

	学習内容・活動	教師の支援 指導上の留意点	教材	時間 配当	学習 形態	評価基準
導 入	○全体の流れの説明を聞き、準備をする	○英語による指示を聞いて、英語を使う雰囲気を醸成する		5	全体	
展 開	○試合する生徒は、ネームカードを持って移動する。	○声の大きさや明瞭さを意識すること、聴衆と目を合わせることを指導する。	① ② ③	25	全体	・聴衆にわかりやすく伝える工夫を考えて、語句の精選や発表態度などの改善をしようと試みる。【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】
	ディベートの流れ ○肯定側立論① (2分) ○否定側反論と立論① (2分) ○肯定側反論と立論② (2分) ○否定側反論と立論② (2分) ○否定側総括 (2分) ○肯定側反論と総括 (2分)	(準備時間1分) (準備時間1分) (準備時間1分) (準備時間1分) (準備時間1分)	④ ⑤			
	○聴衆の生徒は、フローシートを利用して、メモを取る。 ○聴衆の生徒は、各発表の間の1分で、内容や自分たちの意見と似ている点などについて話す。 ○司会進行の3名は、担当とタイマー係を決める。	○聴衆の生徒には、どちらの意見がより説得力があるかを判断するよう指示する。				
	○各グループで勝敗とベストスピーカー、コメントを考える。 ○各グループの代表者が発表する。 ○教員のコメントを聞く。	○グループで話し合うよう指示する。 ○生徒の評価に対して指導する。 ○試合全体について指導する。		10	グループ 全体	・聴衆は、肯定・否定の両方の論点を理解して、客観的に勝敗を決めることができる【外国語理解の能力】
ま と め	○振り返りシートに2学期の取り組みをまとめる ○フローシートを提出する。	○振り返りシートを配布し書かせる。		10	全体	